

「ザ・トゥルー・コスト」 各種解説

服の価格が低下しているこの数十年で、人や環境が支払う代償は劇的に上昇している。服を巡る知られざるストーリーにスポットを当て、服に対して本当のコストを支払っているのは誰かという問題を提起し、ファッション業界の間を描き出す。きらびやかなランウェイから鬱々としたスラムまで世界中で撮影を行った。アジアの貧しい国から輸出された衣類は、米国、英国、日本などで大量消費されていく。

大量生産・大量消費が問題視されるファッション業界の間を浮き彫りにしたドキュメンタリー。バングラデシュで 1000 人以上の死者を出した縫製工場の倒壊事故をきっかけに映画制作を決意したアンドリュー・モーガン監督が、世界中のファッション業界をめぐる真実を探り、途上国での人権侵害や環境汚染の上に成り立って来たシステムに警鐘を鳴らすと同時に、人類が今後向かうべき未来を考察。デザイナーのステラ・マッカートニーらファッション業界で絶大な影響力を持つ人々や、世界的に知られる環境活動家バンダナ・シバへのインタビュー、フェアトレードブランド「ピープル・ツリー」の代表者サフィア・ミニの活動などを通し、身近な衣服から変革を起こしていくことの重要性を訴える。

かつて日本の繊維産業が国内生産していたころ、一般的なコットン T シャツの値段は 1500 円～2000 円だった。同程度の品質のモノは今では 500 円で手に入る。劇的な値下がりこそグローバル経済の恩恵、だがその製造現場では低賃金と劣悪な条件の下での長時間労働が常態化している。映画はそんな低価格服の背景にある“搾取”の現実を追う。発展途上国の人々に現金収入の道を提供したと企業側の管理職は言う。現地の工場側はダンピング交渉に応じざるを得ないと答える。しわ寄せはミシンを踏む労働者に行く。確かに市場原理に従って自由な競争が行われている。一方でそれは労働者をコストとしか考えない経営者側が儲かる仕組み。娘と一緒に暮らしたいと願う女性工員の言葉がこのシステムの非人間的な一面を象徴していた。

バングラデシュ人の日当は 3 ドル。労組も有名無実。バングラデシュで 1000 人以上の死者を出した縫製工場の倒壊事故。事前に危険性が指摘されていたにもかかわらず管理者は放置していたという。まさに労働者の命が先進国の安価な衣料を支えている構図、その悲しみが怒りとなってくすぶり、革命前夜のような熱気さえはらんでいる。2008 年の「女工哀歌」と構造はまったく同じ、舞台がバングラデシュに移っただけなのだが、中国の少女はまだ小さな夢を抱けていた。ところがダッカの若い母は娘を養うのに精いっぱい貧困から抜け出せない。こうした現状が遠因となってイスラムの若者を IS にいざない、歪んだ世界に矛先を向けさせているのだろう。

カメラはさらに綿花の遺伝子組み換え化を図る国際バイオ企業にもメスを入れる。日本でも、オーガニックコットンの無印良品 T シャツはユニクロよりも値は張るが肌触りがよく、風合いも長続きする。もう 20 世紀には戻れない、ならばせめて非 GMO 製品を選ぶのが環境を守る手段なのだとこの作品は訴えていた。

滅多に着ない無数の衣服に囲まれるような「先進国」での暮らし。他方、「途上国」の製造現場ではますますひどくなる低賃金と職場、遺伝子組み換え綿シャツの登場。華やかなファッションの陰で、大量生産・大量消費が進行し、これによって、人々が苦しみ、環境までもが傷つけられている現実

に驚く。人類が今後向かうべき未来をも提示する。